解題「軒丸瓦製作手法の変遷」

山本　忠尚(天理大学)・花谷　浩(奈良文化財研究所)

Ⅰ．納谷論文が日の目を見るまで

私が奈文研内の配置換えによって飛鳥・藤原宮跡発掘調査部に移ったのは1986年４月のことだった。納谷守幸さんは1984年４月に調査部の研究補佐員になっており、すでにかなりの経験を積んでいた。私にとって納谷さんは飛鳥での発掘のノウハウを吸収すべき先輩であった。当調査部における遺物整理と研究のシステムは、発掘調査班とは別個に、土器、木器・金属器、瓦の３整理室体制を採っており、私は瓦を希望し、受け入れられた。先任のメンバーとして大脇潔さんと納谷さんがおり、ここでも納谷さんからいろいろ教えを受けることになった。

瓦整理室で積年の問題となっていた点の一つは、軒瓦に型式番号を付けることであった。平城宮、藤原宮の軒瓦にはすでに型式番号が付され、データベース化が進んでいて、地域毎に特定の軒瓦の出土数を検索するなどに役立つことが認知されていたからである。ところが、飛鳥時代の軒瓦は瓦当紋様の種類が多岐にわたり、一つの寺院、一つの堂塔でも数種の軒瓦が使用されており、一筋縄ではゆかない。山田寺Ａとか川原寺Ｂなどと寺ごとに分類し、法隆寺３Bbは飛鳥寺Ⅷbおよび豊浦寺ⅡBbと同笵である、などと表現せざるを得ないのである。また、単に瓦当紋様によって分類するだけではなく、製作技法など他の要素も加味して、全国に及ぼせるような分類が要求された。それまでにも、紋様の特徴から「弁端切込」とか「角端点珠」などと呼んで、ある程度は大局的に捉える試みはあったのだが、なかなかうまくゆかないのが実状だった。

そのような中、ある日私の研究ブースに現れた納谷さんは、「山忠さん、ちょっとこれ読んでみてくれへん。」と言って一綴じのプリントアウトした原稿を差し出した。今、思い出を辿ってみると、富山県小杉町への就職が決まり、今までの瓦との付き合いを論文の形で残しておきたい、という望みが「文章を書くことが好きでない」彼を動かしたのであろう。奈文研への恩返しといった思いもあったかも知れない。だとすれば、これは彼が富山へ旅立つ1988年10月の直前のことであったはずだ。私は一読するなり、これは瓦研究にとって貴重な文章なので、何らかの形で発表する価値があると思ったが、文章表現や構成にやや難があるので、もう一度練り直し、表現にも工夫を加えた方が良いと判断、とりあえず草稿は預かり、改稿したものを再度提出してもらうことにした。

納谷論文が独創的だったのは、紋様の特徴と製作技法を組み合わせて軒丸瓦を大分類したばかりでなく、その特徴を端的に捉えて「花組」「星組」「雪組」と命名したところにある。どのような成り行きでこのような名を思いついたのか。彼は石川県の出身で、宇出津高校から関西学院大学を卒業された。宝塚に地縁があったのは確かなようだ。ただし、歌劇団に興味を持っていたかどうか。飛鳥寺創建に際して４人の瓦博士が派遣された。１人１人を瓦工の系統の違いと捉えると、飛鳥時代にはもう２組の造瓦集団があったことになる。宝塚歌劇団にはもう一つ「月組」があり、その後「宙組」が増えたと聞く。研究が進めばあるいは対応してゆくのかも知れない。

その後すぐに納谷さんは別の地で活躍することとなり、私とは間遠となった。ところが彼が与えた名称だけが先走り、幾多の論文に用いられるようになった。瓦研究者の間では、「星組」といえば角端点珠で丸瓦部先端を片枘に加工している、ということはいわば常識となったのである。しかし、そのうち何割の人がこの用語の命名者が納谷さんであると理解していたであろうか。納谷論文に日の目を見させなければならない、と思って私なりに手を加えたこともあったが、自分自身の職場が替わったこともあって、実現しなかった。

今回、明日香村の相原嘉之さんや奈文研の花谷浩さんたちの努力で、納谷論文がようやく活字となり、永年の宿題が果たせた。もう彼とは一緒に酒を飲んだり、「山忠さん、それロン」と言われて悔しがったりすることは出来ない。でも、独創者としての彼の名を残せたことで寂しさもいくらか紛れるであろう。（山本忠尚）

Ⅱ．花組・星組・雪組によせて

納谷さんの論文が執筆された1988年頃、飛鳥時代瓦の研究は新たな展開をみせていた。それは、瓦博士来日1400年を記念するかの如くだった。

大きなきっかけは、1982年の亀田論文だったのではないか。この論文は、百済の瓦を総合的に紹介するとともに軒丸瓦の製作技法に光をあてていた。また、この年、白石論文が古墳時代の終末時期、つまりは７世紀の年代論に一石を投じ、翌1983年には瓦陶兼業窯の京都府隼上り窯の報告も刊行された。これらの成果を受けて、1986年に菱田論文が登場し、飛鳥時代初期の瓦を紋様と技法と両面から検討する方向付けがなされた。今や瓦研究者間では耳馴染みの「片ほぞ形」接合という用語も菱田論文に始まる。亀田論文で「二回ケズリ」とよばれた技法がそれで、日韓にわたる技法の共通性がみえてきたのと同時に、瓦工人の系譜論・系統論が実証的に進められることとなる。須恵器と瓦の関係についても、工人論や年代論の面で関心が高まってきた。

そのような研究の中心といえば、飛鳥をおいてない。納谷さんが奈文研に入所し飛鳥藤原宮跡発掘調査部に配属されたのは1984年。飛鳥の寺院跡調査は画期的な成果をあげつつあった。1984年には山田寺で飛鳥時代の回廊部材そのものが出土したし、飛鳥寺では西回廊・西門近接地・南方広場・東辺部など各所を調査している。翌1985年には、豊浦寺講堂基壇が初めて確認され、その下層からは石敷遺構と掘立柱建物がみつかった。豊浦宮とおぼしき遺構である。飛鳥寺の西面大垣が一部再確認され、また坂田寺で鎮壇具が発見されたのもこの年である。1987年には奥山廃寺塔跡を発掘調査している。

平城調査部でも、1980年代前半に法隆寺の防災工事にともなう発掘調査をおこない、その成果を発表しつつあった。若草伽藍創建期の九弁蓮華紋軒丸瓦が、飛鳥寺と同笵だと判明したのはこの頃である。さらに1985年からは法隆寺昭和資財帳の製作に関わって、法隆寺所蔵瓦の悉皆調査が始まると、平城調査部の考古第三調査室（瓦担当）では、奈良時代の瓦だけでなく、７世紀の瓦について夜な夜な議論をするようになっていた。

このような中で、飛鳥の現場に立ち会い、また瓦整理室で膨大な瓦と格闘していた納谷さんには、飛鳥時代瓦工の姿が間近にみえて来つつあったのではないか。菱田さんがオーソドックスに寺院名で瓦工グループを表現したのに対し、納谷さんはタカラヅカを気取った。「花組」「星組」「雪組」である。

この着想は斬新で、所内では早くから広まっていた用語ではあったが、なにぶん本人が論文

を発表しないので使えなかった。たぶん、1996年に大脇潔さんが早稲田大学考古学会の『古代』第97号に掲載された論文（「飛鳥時代初期の同笵軒丸瓦－蘇我氏の寺を中心として－」）が、「花組」と「星組」の最初の紹介であろう。注釈に、「軒丸瓦製作手法の変遷－飛鳥地域出土の七世紀前半代の資料を中心にして」1988年・未刊、と掲げて納谷さんのオリジナリティを尊重されている。

納谷さんに遅れること５年、私も藤原調査部に配属となり、飛鳥の瓦に日々接することになる。飛鳥の瓦をみればみるほど、納谷さんの「花組」「星組」「雪組」は便利な用語だと思うようになった。で、何度か「はよ、発表してや」と督促したが、「もうええから花ちゃん使うてくれたらええよ」と、いうばかり。例のはにかみ笑い付きで、である。

その論文にようやく陽の目をあてることができた。納谷論文の書きぶりはかなり手堅い。まず、飛鳥寺を筆頭に、史料によって創建年代が明確な寺々をとりあげ、６世紀末から７世紀前半にわたる瓦製作技法の変遷と系統関係を明らかにする。分類された瓦工人の系統が、「花組」「星組」「雪組」である。彼らが、飛鳥地域から斑鳩地域、あるいは南山城や摂津へと活動の場を広げていく姿、そして工人集団間の交流のさまが活写される。

次いで、創建年代に関する文献史料を欠く寺院跡の瓦をとりあげ、それらの寺でも前段で述べられたのと同様の製作技法が採用されていることを示し、それによって創建年代や造営過程について十分根拠のある仮説を提示している。

最後に、納谷さんは、飛鳥時代瓦の段階設定をおこない、飛鳥寺に始まる第１段階と山田寺に始まる第２段階を設定した。第２段階における工人の動向や、第３・第４段階があるのかどうなのか、は触れられていない。どんな構想があったのか、気になるところである。

さて、1998年、藤原調査部の瓦整理担当者たちは、毛利光俊彦さんを代表に『古代瓦研究会』なるものを立ち上げ、瓦博士渡来以降の瓦について、紋様と技法の両面から議論を始めた。研究会ごとにレジュメを作り、素弁蓮華紋瓦の世界は『古代瓦研究Ⅰ』にまとめた。飛鳥の瓦、飛鳥時代の瓦に関して、今現在わかっていることを提示し、同じ紋様をもった瓦との比較研究をかなり進めることができたのでは、と思っている。

今回、納谷さんの論文を公刊するにあたり、オリジナル原稿を天理大学の山本忠尚さんから手渡され、図面の作成と多少の「編集」をした。それを、研究会の手伝いをしてくれているＳ女史に校正がてら読んでもらい、感想をきいてみた。「瓦研究会でやろうとしてることが書いてありますね」。的確な返答が返ってきた。

紋様と製作技法の一体性を基準に瓦工単位を把握できないか、畿内からの瓦作りの波及がどのような経緯を経ているのか、どのような瓦工単位・集団を媒介としているのか。そして、波及ないし伝播の契機は何か。それには、現実に目にすることができる資料＝瓦、の分析が欠かせない。その分析の仕方に関して、この納谷論文は重要な視点を示している。それは、納谷流にいえば「瓦がそうやねんから、みたらわかるやん」ということだろう。でも、見ると観るは違う。その違いはどの狭間に生まれるのか。この論文はそのあたりを十分に示すだけの力があると思う。

納谷さんとは、年も近かったし、研究所入所が一緒やし、飛鳥池遺跡も最初の時は一緒に掘ったなあ、もうちょっとの差でキトラ古墳の壁画はみせてやれへんかったなあ、などいろいろ思い出したり、悔やんだりすると、涙がとまらん。つたない解題だけど、堪忍な。

（花谷　浩）